## 2. 全体総括

平成16年（2004年）２月13日（金）に、**中等教育研究協議会**を本附属学校で、２月14日（土）に**第３回全国中高一貫研究大会**を名古屋大学の豊田講堂とシンポジオンにおいて開催いたしました。全国より550名余の参加者があり充実した研究協議会となりました。

中等教育研究協議会のテーマは「**ともに学びを創る－中高のキャリア意識の形成と自立的な学びを育てるカリキュラムの開発－**」で、第３回全国中高一貫研究大会のテーマは「**中高一貫教育を考える**」です。

本校では、文部省の研究開発学校（1995～1997）の指定を受けて新しく設置した「総合人間科」（総合学習）を、委嘱期間終了（1998年３月）後もその実践を継続しています。そして、中高を一貫させた、総合学習（総合人間科）をさらに発展させるべく研究と実践を重ねてきました。

平成12年（2000年）度から併設型の中高一貫校として発足すると同時に、文部省の研究開発学校（2000～2002）の指定を受け「高大の連携」を生かした「青年期のキャリア形成」に取り組み、現在は引き続いて文部科学省の研究開発学校（2003～2005）継続の指定を受けて「青年期のキャリア形成」に資する併設型の中高一貫カリキュラムの実践と評価に取り組んでいます。総合人間科の発展とその成果をどのように教科指導にいかすか、さらには新教科の開発や大学連携など新たな諸課題についても追究しています。

さて、２月13日の中等教育研究協議会、午前の中学校の公開授業のテーマは［教科の授業と特色のある授業］です。「教科の授業」は基礎英語・基礎数学・国語・英語・理科・社会の６つを、「特色のある授業」は心の教育として体験的に対人関係構築スキルを教室で学ぶ「ソーシャルライフ」の授業と中２と中３が一緒に学ぶ「選択プロジェクト」（９教科11講座）から６つの講座を公開しました。

本校の「併設型中高一貫カリキュラム」の特徴の一つであるヒューマンプログラムに位置づく「ソーシャルライフ」の授業は、中学一年から始まり、学校における学習と生活のベースとなる新しい授業だからです。

「選択プロジェクト」は高校の新教科群（４科目）につながるもので、中等教育におけるキャリア形成意識形成の中での前期の選択であると位置づけられています。

また高等学校の公開授業のテーマは［新教科と教科・総合的な学習の時間「総合人間科」］です。４つの「新教科群」の中から高２の「共生と平和の科学」を、教科における「大学連携の授業」として政治経済と家庭を、総合的な学習の時間「総合人間科」から高１の「生命と環境Ⅱ」と高３の座談会「キャリアを語る」を公開しました。特に「併設型中高一貫カリキュラム」の中の高校１・２年の「新教科群」（４つの科目）は、既存教科と総合学習「総合人間科」とをつなぐもので、クロスカリキュラムで行わける高校における新しい教科の授業です。

これらの公開授業を通して、本校で実践研究をしている「併設型中高六年一貫カリキュラム」の全体像について紹介をしました。

午後の分科会では、午前中の公開授業の参観をもとに、５つのテーマ別に分かれて研究協議をしました。

「Ａ人間関係構築スキルを教室で学ぶ」（ソーシャルライフ）「Ｂ中学における必修教科と選択教科を考える」（選択プロジェクト）「Ｃ高校における教科の未来」（新教科群）「Ｄ21世紀の学力」（８つの力と２つの基礎力）「Ｅ青年期のキャリア形成を考える」（総合人間科）の５分科会です。各分科会とも参加者による熱心な質疑応答により充実した研究協議となりました。

翌日、２月14日（土）の全国中高一貫研究大会の講演は、文部科学省初等中等教育局初等中等教育企画課教育制度改革室の田中正幸氏に「中高一貫教育の現状と課題」と題して話していただきました。田中氏は、平成15年度11月においては、118校となる各都道府県における中高一貫教育の設置状況の概要から話し始められました。中高一貫教育は特色ある教育課程の編成が可能であり、教育課程の基準の特例を活用することができる。今後の課題は進路指導・入学者の選考の工夫などで、六年間を見通した教育課程の特色づくりと評価であると話されました。明確で実践上の示唆に富む講演でした。

引き続いて二会場に分かれて、シンポジウムⅠとⅡを持ちました。

**シンポジウムⅠ**（於　豊田講堂）のテーマは「**中高一貫教育の成果と課題**」です。

シンポジストの奈良女子大文学部附属中等教育学校　吉田信也氏は「中等教育学校カリキュラムの開発とその評価」について、高知県立中村中学校（併設型中学校・高等学校）教頭　谷範浩氏は「本校におけるキャリアプランと中高の交流」について、山口県立安下庄高校（連携型中学校・高等学校）校長　黒田洋氏は「連携型の成菓と課題－橘・東和地域（山口県）について－」で、それぞれの学校の成菓（カリキュラム　生徒の姿　校内組織）（キャリアプラン　プレゼンテーション能力）（中高の教員の連携・中高の生徒の交流）について紹介されました。

コーディネーターの東京大学教育学部附属中等教育学校　副校長　草川剛人氏から、立ち上げ前の中高一貫教

育の諸問題の克服方法はどうだったかについて、各先生へ質問されました。黒田先生からは、地域との連携・中高教員間の交流・中高一貫委員会設置。谷先生からはそれぞれの教員組織・文化の違いへの配慮。吉田先生からは中高一貫は教員（相互理解）から始まると答えられました。

次に、それぞれの学校の課題についての質問があり、連携型の黒田先生よりは①学力の充実　自主学習の習慣づけ②さらなる高校の特色づくりと進路（出口）保障と広報活動　③小学校との連携のお話がありました。

併設型の谷先生からは①高校での単位②他校への進学についてのお話がありました。中等教育学校の吉田先生からは多元的カリキュラム評価（独立評価者による）と授業観察（他教科・保護者・評議員）と教育課程実施状況調査。生活アンケートよりみられる本校の課題については①さらなる基礎学力の定着②中だるみ（自宅学習の時間）をあげられました。

中高一貫校の三つの形態による違いはあっても、中高一貫教育に共通するさまざまな成菓がだされるとともに、それぞれの課題についても学ぶことができました。

**シンポジウムⅡ**（於　シンポジオン）のテーマは「**六年一貫の学校づくりに向けて**」です。シンポジストの白鷗高校開設準備室（都立中高一貫校）教頭　増田稔氏は「東京都立学校初の中高一貫6年制学校開校に向けて」（開設準備の課題）について、名古屋大学教育学部附属中学・高等学校（併設型）副校長　丸山　豊氏は「中高一貫教育における生活指導の在り方と学校運営」（中と高の生活指導・自治の力の育成）について、早稲田大学教育学部教育学科教授　安彦忠彦氏は「中高一貫カリキュラムの今後のあり方」（中等教育の概念の明確化）について、それぞれお話をされました。

その後コーディネーターの教育学部教授の速水敏彦先生から中高一貫の学校づくりに向けての観点がだされ、質疑応答に入りました。①適性検査の内容とその作成について②中高一貫教育にあたる教員の研修について③中高校生の交流と行事④自治の力を育てる生徒会活動とそのあり方⑤中・高の教員の温度差の解消方法⑥中等教育の前期でつくっておく力と観の形成⑦中学生の自立への見方が教員間での違い～哲学を考え始める中高校生への教員の向き合い方についてなどが取り上げられました。フロアーとの活発な質疑応答で「これからの六年一貫教育の学校づくり」についての実践的かつ基本的な観点を掘り下げて学ぶことができ、参加者にとって有意義なものとなりました。

さて、教育を取り巻く環境が大きく変化し少子高齢化の進む中で、中・高一貫教育（中等教育）のカリキュラムを考える取り組みは始まったばかりです。文部科学省の後援を初めて受けて開催された「中等教育研究協議会・第3回全国中高一貫研究大会」に全国から集まられた参加者がともに情報交換をし、これからの中・高一貫教育（中等教育）における教育実践を考えるための具体的な方策を学び合うことができ、充実した二日間の研究協議会を終えることができました。

（文責：斉藤真子）